

屋代本『平家物語』における維盛関連記事の形成

原田 敦史

はじめに

屋代本が、語り本系『平家物語』の成立を考える上で重要な伝本であることは、論を俟たないであろう。その本文の研究においては、読み本系諸本との関連を考えなければならぬという認識も、広く共有されているものである。中でも特に、千明守氏が、

屋代本・覚一本の本文のその源には、現存の延慶本そのものということはできないにしても、延慶本に近い形態をもった本文の存在を想定することができる。⁽¹⁾

と論じられたことは大きかったと思う。以来、屋代本をはじめとする語り本系諸本の本文の検証は、多くがこの「延慶本の本文」との関わりを視野に入れて行われてきた。本

稿もまた、そうした成果に導かれつつ、巻十の平維盛に関する記事を対象として、屋代本の本文がどのように形成されたのかを検証し、併せて語り本系『平家物語』の特質の一端について考えようとするものである。その過程で、読み本系諸本にも多く言及することになるが、延慶本以外の本文にも、順次目配りをしていきたい。「延慶本の本文」の具体像が必ずしも明らかでない現状にあっては、延慶本以外の読み本系諸本をも視野に入れておくことは有効だろうと思われるからである。

一

本稿では、屋代本巻十前半の維盛関連記事を中心に扱う。平家が一の谷の合戦に敗れ、「三位中将」が生けどられ

たとの報は、都に隠れ住んでいた維盛北の方のもとへも届き、大きな衝撃を与えた。「三位中将」は夫ではなく重衡だということはずくに判明し、斉藤五、斉藤六の兄弟によって、討ち取られて大路を渡された首の中にも維盛のものはなかったことを知らされるが、維盛が合戦に参加できなかったのは重い病のためであったと聞き、北の方の心が晴れることはなかった。検討の対象とするのは、以上の記述に続く部分である。本来は一続きだが、便宜上A・B・Cの三つに区切って考察する。その過程で、読み本系諸本をも参照することになるが、読み本系の維盛記事には、屋代本その他の語り本系諸本に見られないものが少なくない。そのため、本稿の論述に関わる範囲のおおまかな記事構成を、延慶本と四部合戦本を対照させる形で、表にして整理しておく。

I	延慶本
II	i 維盛、北の方からの音に心乱れる。 i 維盛と北の方、和歌の贈答。続けて延慶本 I の一部に相当する記事

III	ii 維盛、宗盛から二心を疑われる。 iii 維盛、出家を決意。 (卷九・十七)	IV	北の方、維盛の身を案じる。生けどられた「三位中将」は夫ではないと聞くが、心痛はやま (卷九・三十)	V	i 斎藤兄弟、平家首渡しを見て維盛が含まれていないことを確認。 ii 維盛は病氣と知り、北の方は嘆く。 iii 維盛、都へ音信。「イヅクトモ」歌。(卷九・廿二)	III	ii 維盛、宗盛から二心を疑われる。 iii 該当記事なし
-----	--	----	--	---	--	-----	----------------------------------

なお、本稿で問題にする範囲では、長門本は延慶本とはほぼ一致し、四部本は南都本と近い。

以上を踏まえて、まずは

〔A〕三位中将モ通フ心ナレハ、都ニサコソ我ヲ無_二覚束_一思ラメ、頸共ノ中ニハ見ストモ、水ノ底ニモ沈ミヤシヌラントテコソ歎ラメ、未_レ此世ニ長ラヘタルソト知セハヤトハ思ヘトモ、^①忍タル棲ヲ人ニ知センモサスカナレハトテ、啼々明シ暮サセ給ケリ。^②夜ニ成レハ、余三兵衛重景、石童丸ナト云者ヲ喬ニメシ、都ニハ只今、我事ヲコソ思出ラメ。少キ者共忘ルトモ、人ハ忘_レ隙アラシ、^③角_一独_二只_一イツトナク明シ暮セハ慰ム方ハ無_レトモ、越前三位上ヲ見ニハ、賢クソ少キ者共ヲ都ニ留置タリケル」トテ、泣々悦給ケリ。^④北方ハ、商人ノ便ニ文ナトノ自ラ通ニモ、「ナト今マテ迎ヘ取セ給ハヌソヤ。疾シテ迎ヘ取セ給ヘ。少者共モ不_レ斜恋シカリ奉リ、我モ尽セヌ物思ニ長ラウヘキ様モナシ」ナント細々ト書ツ、ケ給ケレハ、^⑤三位中将此御返事見給テモ、^⑥何事モ思入給ハス、臥沈ミテソ歎カレケル。大臣殿モ二位殿モ聞_レ之給テ、「サラハ北方、少キ人々ヲ奉_二迎取_一」一所ニテ何ニモ成給ヘカシ」ト宣ヘトモ、「我身コソアラメ、^⑦人ノタメ系惜ケレハ」トテ、泣々月日ヲ被_レ送ケルソ、セメテノ志_一程モ顯レケル。サテモ可_レ有ナラネハ、近フ召仕レケル侍ヘ一人シ

タテ、都へ上セ給二、三ノ文ヲソ被_レ書ケル。^⑧

の部分から検討する。都で北の方が維盛のことを案じ続けていたころ、維盛もまた「通フ心」ゆえに妻子のことで心を痛めていたとする書き出しは、読み本系のV・iiiと共通する。以下の記述の中にも、断片的に読み本系に通う表現が極めて多く用いられており、番号を付した傍線部がいずれもそれにあたるのだが、読み本系諸本と対比させたときにまず目につくのは、読み本系諸本においては、それらが個々に離れた場所に散在しているということである。たとえは①は、覚一本や八坂系第一類などの語り本には見えないものであるが、読み本系ではV・iiiに

中将モ通フ御心ナリケレバ、「都ニイカニオボツカナク思ラム（中略）忍テスム所ヲ人ニ見セムモサスガナレバ、ウトカラヌ者ニテコソ、一クタリノ文ヲモヤラメ」トオボシテ、…（延慶本。四部本も類同）

とある。また、屋代本③は、八坂系第一類（中院本など）には見えるものの、覚一本にはない表現だが、これはⅢの箇所にて

権亮三位中将此有様ヲ見給テ、「カヤウニヒトリ明シ晩ハナグサム方モナケレドモ、賢クゾ此人ヲ留置テケル。我モ引具シタリセバ、終ニハカ、ル事ニコソアラマシ」

ナド、セメテノ事ニハ思ツケラレ給ケリ。(延慶本。四部本類同)

とあるのと重なっている。屋代本は、これらの記事を卷十の一箇所に集めたような形になっているのだが、本稿はこのような屋代本の本文が、読み本系的な本文の再編という過程を経て作られてきたと見るものである。すでに池田敬子氏によってなされている、

屋代本は、卷十にまとめて維盛の心理描写部分を置く。

その文脈には少々乱れがあり、先行本文との関係を暗示するところかと思われる⁽⁴⁾。

という指摘は、そのように考えるための糸口となるだろう。

②・⑤に目を向けてみたい。②における維盛の感慨は、平家が一の谷で大敗を喫した直後だという現状に対応していない。都の北の方は、今回の合戦で夫が命を落としたのではないかと案じ、維盛自身もまた「通フ心」ゆえに、「頸共ノ中ニハ見ストモ、水ノ底ニモ沈ミヤシヌラントテコソ歎ラメ」と、妻子を思いやっていたはずである。②における「少キ者共忘ルトモ、人ハ忘隙アラシ」という表現は、そのような状況にそぐわない、緊迫感に欠けたものとなっているといわざるを得ないだろう。⑤の矛盾はさらに明瞭である。維盛は北の方からの「御返事」を読んで悲しんだ

ことになっているが、これより前の部分に、二人が手紙のやりとりをしていたという記述は、一つもないのである。これらの不自然な表現は、再編の過程で生じたものと考えるのが妥当であろうが、この点を説明するために先行本文として想定しうるのは、延慶本ではなく四部本である。四部本ではⅡ・iiiの位置に、

平家、都へ返り入るべしと聞こえければ、余党の都に残り留まりしも、式代の文をぞ遣はしける。権亮三位中将も、自づから福原の商人の便りに、君達の御許へ消息を奉りたまふ。其の便りにぞ、亦御返事も有りける(中略)夜にも成るに、余三兵衛重景・石童丸を近付けたまひて、「都にては寢寤もや為るらん、我が事のみを云ひ出だすやらん。少き者共は忘るゝにも世も忘れじ者を」とて、涙を流して明かし暮らしたまふ。(南

都本も類同)

とあり、一の谷合戦以前の二人の交信、「御返事」の語、子供は私を忘れても妻は忘れていないだろうという維盛の思いなどが、それぞれ矛盾や不自然さのない形で見出されるのである。屋代本がこうした本文を改編することによってできあがっていること、その過程で文脈に乱れを生じさせたことは、間違いないだろう。先述のように、これまで語

り本の成立を考える際には、「延慶本的本文」との関連が重視されてきた^⑥。しかし、以上の例を併せて考えれば、語り本の母体となった本文の「面影を探る上で、延慶本（あるいは長門本）以外の読み本系諸本との関係を視野に入れなければならないことは明らかである。

だがその一方で、延慶本との関連でしか説明のできない箇所もある。④・⑥・⑦の部分である。該当する表現は四部本や南都本には見いだせないが、延慶本Ⅱには

〔i〕権亮三位中将ハ、年隔タリ日重ルニ随テ、古郷ニ留メ置シ人々ノ事ノミ無_二穴倉_一恋クゾ被_レ思ケル。商人ノ便ナドニ自ラ文ナムドノ通ニモ、北方ハ_二相構テ迎取給へ。少キ者共モナノメナラズ恋シガリ奉ル。ツキセヌ歎ニナガラウベクモナシ_一ナムド、細々トカキツゞケ給ヘルヲ見給ニ付テモ、「アワレ迎取奉テ、一所ニテトモカクモナラバ、思事アラジ」ト思立給事ヒマナケレドモ、人ノ為イトヲシケレバ、思忍テ日ヲ送ル。

〔ii〕サルマ、ニハ余三兵衛、石童丸ナムドヲ常ニアト枕ニ置キ給テ、暁テモ暁テモ、只此事ヲノミ宣テ、臥沈ミ給ヘバ、三位中将ノ有様ヲ人々見給テ、「池ノ大納言ノ様ニ頼朝ニ心ヲ通シテ、二心有」トテ、大臣殿モ打トケ給ハネバ、「ユメ／＼サハ無物ヲ」トテ、イトゞア

チキナクゾオボシメサレケル。

〔iii〕「愛執増長、一切煩惱」ノ文ヲ思ニハ、穢土ヲ厭ニイサミナシ。閻浮愛執ノキヅナコハケレバ、浄土ヲ欣ニ倦シ。宿執開発ノ身ナレバ、今生ニハ妻子ヲ念フ心、合戦ニ向思ニ身ヲ苦メテ、来生ニハ修羅道ニ落ム事疑ナシ。只一門ニ不_レ知_レシテ都エ忍テ上テ、妻子ヲモ見、妄念ヲモ払テ、閑ニ臨終セムヨリ外ノ事有ベカラズ」ト思ナラレニケレバ、何事モ思入レ給ハズ、臥沈給フゾ哀ナル。

とある。本稿にとつて重要な部分なので、煩瑣を厭わず全文を引いたが、iiiの傍線部は屋代本の④・⑦に、iの傍線部は⑥に、それぞれ重なっている。屋代本の場合、特に④に関しては、一の谷合戦の余燼くすぶる中で商人を介した音信というのは考えにくく、一門の大敗、夫の病を知りながら全く気遣わず、ただ一方的に「迎えとれ」というのも、文脈になじんでいない。しかし、延慶本Ⅱは一の谷合戦の前にあり、屋代本のような問題は生じていない。屋代本の不自然さは、やはり先行本文を崩したことによると思われるのだが、この場合それは延慶本的な形との関連でしか考えられないのである。同時に、⑥の用いられている文脈が延慶本iiiと全く異っているのを見れば、屋代本の先行本文

に対する利用態度が、極めて断片的なものであったことも窺知できよう。

以上からは、結局屋代本の成立を考える上では、四部本の本文と延慶本の本文の、双方との関係を想定しなければならぬことになる。少なくとも二種以上の本を参照して作られたのか、それとも読み本系の中に双方の特徴を併せ持つ伝本があつたのかまでは、現段階で断定はできないが、屋代本が読み本系的な本文を基に作られたことは明らかだろう。それが、先行本文の文脈をかなり自由に解体し、時に断章取義的ともいえるようなやり方で切り貼りして組み直すという方法で行われていることにも、注意をしておくたい。

二

屋代本本文の形成過程を右のように考えるならば、それは他の語り本とどのような関係にあるのか。他の語り本系諸本にも目配りをおこななければならないだろう。特に注意されるのが覚一本である。覚一本では、屋代本のAに該当する部分が、

三位中将もかよふ心なれば、「宮こにかにおほつかな
くおもふらん。頸どものなかにはなくとも、水におほ

れてもしに、矢にあたつてもうせぬらん。この世にある物とはよもおもはじ。露の命のいまだながらへたるとしらせたてまつらばや」とて、侍一人したてて宮こへのほせられけり。三の文をぞか、⁸⁾れける。

とあるのみで、屋代本②と⑦の内容が、そっくり抜けている。維盛が、商人を介した北の方とのやりとりを経て、迎えとりたい気持ちを押し殺すという、屋代本④と⑦に該当する内容は、覚一本では巻九、読み本系のⅡの位置に置かれている。屋代本と四部本の本文との関連が指摘できた⑤は覚一本において欠けており、その点のみに着目すれば、四部本の本文との接触が、語り本系本来のものではなく屋代本独自のものだったとの可能性も浮上する。しかし、屋代本の②にあたる表現は、中院本の同箇所にも見出すことができ、四部本の本文との関連が、屋代本のみの問題などではないことは明らかである。さらに、続く部分の本文からは、当該箇所に関する限り、他本に比して屋代本こそが、語り本系の初期の姿に近いことが推測できるのではないかと⁹⁾思われる。

[B]先ツ北方へノ御文ニハ、「一日片時絶間ヲタニモ、ワ
リナフコソ思シニ、空キ日数モ隔^タリヌ。⁸⁾都ニハ敵充^キ
満テ、我身一ノ置所タニアラシニ、少キ者共引具テ、

サコソ心苦ク御坐ラヌ。疾シテ奉^ト迎^ハ取^一、一所ニテ
何ニモナラハヤト思ヘ共、御為心苦シケレハ」ナント
細々書テ、奥ニハ一首ノ歌ヲソ被^レ書タル。

⑨ イツクトモ知ヌアフ瀬ノモシヲ草カキラク跡ヲ形
見トハミヨ

少キ人々ヘノ御文ニモ「徒然^{ツレク}レヲハ何ニシテナクサム
ラン。疾シテ迎^レ取^スルソ、サコソ有ラメ」ナント書
テ、奥ニハ「六代殿ヘ維盛、夜叉御前ヘ維盛」ト書テ
日付セラレケリ。是ハ、我イカニモ成テ後、形見ニモ
見ヨトテ、中將角ハ被^レ書ケル也。御使^ヒ都ヘ登^リ、此御
文ヲ奉ル。北方御文見給テ、思入テソ被^レ歎ケル。

一の谷合戦後、維盛が家族に書状を送ったという、内容
的には読み本系のV・iiiに相当する部分である。⑨の和歌
は四部本にはなく、傍線部⑧は、延慶本では巻八のIの位
置に

「イカナル有様ニテカ有ラム。誰アワレミ、誰糸惜ト
云ラム。我身ノ置所タニモアラジニ、少者共引具テ、
イカ計ノ事ヲカ思ラム：」

とあるものである。屋代本が、ここでも延慶本の本文の
影響下にあることが確認できるとともに、先行本文を断片
的に切り取って利用するという方法が、相当な広範囲を射

程に収めていることも看取される。ただしこのBには、読
み本系とは一致しない、独自の要素がある。二重傍線部に
おいて、維盛が北の方に対して、「迎えとるつもりはない」
と明言してしまふことである。延慶本V・iiiでは、

「今日マデハ露命モ消ヤラズ。少キ人々何事カアルラ
ム」ナド細々ト書給テ、ラクニ、

イツクトモシラヌナギサノモシラクサカキラクア
トヲカタミトハミヨ

とあるのみであり、和歌の有無をのぞいて四部本もほぼ等
しい。心中に「思立給フ事」があったことが地の文で明か
されているが、「迎えとる」という都落の際の約束を破棄す
る意志を、読み本系の維盛が妻子に向かつて表明すること
はない。二重傍線部は、屋代本を含めた語り本系独自のも
のなのであるが、屋代本以外の語り本では、この部分と前
との接続が不自然なのである。覚一本を例にとるならば、
前掲のように、維盛にとつては「宮こにいかにおぼつかな
くおもふらん」露の命のいまだながらへたとしらせたて
まつらばや」という思いが、都へ書状を出す直接の動機と
されている。この点は屋代本も同様である。ところが覚一
本の場合、そうして出された書状が、妻子を自らのもとへ
迎えとることを拒否する内容だということになってしまふ

のである。これは中院本でも同様である。なぜ、妻子を安心させるために出したはずの書状の内容が、彼らを絶望させるものでなければならぬのか。読み本系Vではこのような問題は生じておらず、覚一本の不自然な文脈が、読み本系的な形からいきなり作り出されたとは考えにくい。覚一本本文は、何らかの略述を経ていると見るのが妥当だろう。「三の文」以前に維盛と北の方との間には何らかのやりとりがあり、覚一本はそれを省略したのではないかというのだが、該当する内容を語り本系諸本の中に探そうとするならば、屋代本の②から⑦に至る文脈以外にない。覚一本の不自然さは、屋代本のような形から、②～③を削除し、④～⑦の部分を巻九に移したことによると考えるのが、最も蓋然性が高いのである。

②・③を屋代本と共有していないが、④以下を欠いたまま「三の文」へと接続する形となっている中院本が、巻九に該当記事を持っていないことも、以上のような推論の傍証となるだろう。屋代本は、読み本系的な本文からの再編の痕跡と思われる箇所を、他の語り本以上に多く残しているが、先述のように、その文脈には未熟な点が多い。新たに成立した語り本系の本文には、さらなる洗練が必要だったであろう。そうしたときに、異本編者がそれぞれの方法

で整理を行った結果が、覚一本や中院本の形なのである。②～③を削除し、④～⑦を巻九へと「戻した」のが覚一本であり、一方の中院本は、Aの出だしにある「都の妻子が自分の安否を気遣っているだろう」という維盛の心中描写を省くことによって②との矛盾を解消している。その上で、④～⑦は完全に削除したのである。覚一本と中院本がともに、自身の無事を知らせ、安心させるためのはずの書状が、逆に妻子を絶望させる内容となっているという問題を新たに生じさせているのは、双方が屋代本的な本文に手を加えて成立していることを証しているように思われる。

とはいえ、前掲Aの波線部は、宗盛や二位尼が維盛をいたわるといふ、他本に見えない特異な内容であり、こうした部分まで含めて、現存屋代本の形を語り本成立当初の姿そのものであると見ることには躊躇される。あくまでも、「屋代本的本文」が、古い語り本の面影を留めているのだという言い方にならざるを得ないことは、付言しておきたい。

三

以上のようにして成立した屋代本が、いかなる物語であることを志向していたのかは、続くCの部分に明瞭である。

【御使、急キ可レ下之由申セハ、「サルニテモ暫ク。御返事ノ有ンスルソ」トテ、泣々起上、細々ト御返事書テソ給ケル。若君姫君モ筆ヲ染テ、「サテ御返事トハ何ト書ヘキ」ト申給ヘハ、母御前、「只兎モ合モ、和御前カ思ハンスル様ニカケ」トソ宣ケル。「ナト今マテ迎ヘトラセ給ハヌソヤ。穴御恋シ〜」ト詞、モ替リ給ハス、二人ナカラ同詞ニソ被レ書ケル。

御使屋島ヘ下テ、此御返事進セラリケレハ、三位中将、北方ノ御文ヨリモ、若君姫君ノ、「恋シ〜」ト被レ書タルヲ見給テソ、今一キハ無ニ為方一ハ被レ思ケル。三位中将今ハイブセカリツル古郷ノ伝聞晴給ヘ共、妻子ハ従来心ヲ悩マス物ナレハ、恋慕ノ思イヤマサリケリ。抑今ハ穢土ヲ厭フニ無レ勇、閻浮愛執ノ綱強ケレハ、浄土ヲ願フニ倦シ。今生ニ妻子ニ心ヲ摧キ、当来ニハ修羅ニ墮ン事心憂カルヘシ。サレハ自是都ヘ上リ、妻子ヲ見テ、妄念離テ、自害センニハ如シトソ思定給ケル。

都の妻子から返信が届き、それを見た維盛が自害の決意をするまでの叙述である。ここでは、読み本系と重なる表現は⑩しかなく、それ以外の【一】で囲んだ部分はおおむね他の語り本系諸本と一致する。この⑩では維盛の決意が

述べられている。四部本などには見られず、延慶本との關係を想定しなければならぬ箇所のだが、いかなる過程を経てその決意に至るのか、延慶本と語り本との間には大きな隔りがある。

延慶本において、⑩に該当する表現が見えるのは前掲Ⅱのiiiである。延慶本Ⅱの文脈をたどると、まずⅡ・iで維盛は、北の方からの迎えとってほしいという懇願に心揺れるが、相手のことを考えて必死にその思いを押し殺す。続くiiでは、妻子を思つて沈んでばかりいる態度が、二心あるものとの誤解を生み、宗盛から白眼視され、そのことを維盛は「アデキナク」思う。それが原因で維盛は、「只一門二不レ知レシテ都エ忍テ上テ、妻子ヲモ見、妄念ヲモ払テ、閑ニ臨終セムヨリ外ノ事有ベカラズ」というiiiの決意へと至るのである。だが屋代本の【一】部には、宗盛らとの確執について一切触れられていない。A・Bで、妻子を強く思いながらも迎えとる意志がないことをはつきりと告げ、それに対して妻子から来た返信、とりわけ「穴御恋シ〜」と、幼い感情をありのままに書き綴った、二人の子供の手紙に接し、「無ニ為方」思つたことが、「自是都ヘ上リ、妻子ヲ見テ、妄念離テ、自害センニハ如シ」という維盛の決意の原因となつたとするのである。この【一】部の内容は、

読み本系諸本には全く見られない。こうした記事によって、妻子への思いこそが維盛のその後の行動を決定づけたのだという、その一点に叙述を集中させているのが屋代本（および他の語り本）の形なのである。⁽¹²⁾それが意識的に選び取られたものであったことは、⑩の本文からも明らかである。屋代本には、「今生ニ妻子ニ心ヲ摧キ、当来ニハ修羅ニ墮ン^{ユツ}事心憂カルヘシ」とあり、中院本でもほぼ同様なのだが、妻子に対する愛執を残すことが、来世で修羅道に墮する因になるといふのは、あまりに耳慣れない言説である。妄執によって動物に転生した話などは説話集類に数多く見えるが、はつきり「修羅道」一つに限定するものは、管見の限り見あたらない。一方、鬪諍を修羅道に結びつける言説は『吾妻鏡』などにも見られ、当時ある程度流布していたものと思われる。⁽¹³⁾⑩の本文は、延慶本Ⅱ・Ⅲのように「今生ニハ妻子ヲ念フ心、合戦ニ向思ニ身ヲ苦メテ、来生ニハ修羅道ニ落ム事疑ナシ」とあったのを崩したものであり、その背景に、維盛の心中描写を妻子への愛という一点に集中させようとする構想があったことは、おそらく間違いないだろう。

四

それにしても、「あぢきなさ」ゆえに「閑かな臨終」を求めると、「せんかたなさ」から「自害」を選ぶこととの径庭は、あまりにも大きい。延慶本Ⅱの維盛は、妻子への思いに苦しむことも、一門に従い、合戦の日々を送ることも、どちらもが仏教的な罪であることを恐れている。それゆえに、その双方を捨てて閑かな臨終を求めることが、自らの救済に繋がることを信じ、希求している。その直接の契機となったのはⅡ・ii、宗盛ら一門の人々から向けられる視線だった。いわれのない白眼視を受け、現世を「アヂキナク」思ったことが、来世の救いを仏道に求めるきっかけになったというのである。その後、妻子への恩愛を断ち切れずにどれほど苦悩することになるとしても、延慶本Ⅱには、来世に救いがあることを信じ、自らの意志でそれに向かつて一步を踏み出そうとした者の姿がある。

卷七の都落の描写を振り返れば、維盛の心中はさらにはつきりする。維盛の立出の場面は次のように描かれていた。

様々ニ誘置給ホドニ、程モフレバ、「大臣殿、サラヌダニ惟盛ヲバニ心アル者ト宜ナルニ、今マデ打出ネバ、イトゞサコソ思給ラメ」トテ、ナク／＼出給ヘバ：

同行を望む妻子を振り切れずにいる維盛に、最初の一步を踏み出させたのは、宗盛に対する意識だったのだ。一門の中には、宗盛との間に確執を抱えて都に留まった、頼盛のような者もいた。だが維盛は、そのような道は選ばなかったのである。彼はこの時、一門に対して「二心」なきことを行動を以て示すことを、自らの意志で選択したのだ。にもかかわらず、維盛はその後も疑われ続けた。一門との同行は、妻子との別れという、この上ない犠牲を払って選択したものだ。それなのに、自らが人々から必要とされず、一門内部における存在意義を否定するような視線にさらされたこと、その失望からくる「あぢきなさ」こそが、維盛を出家へと駆り立てたとするのが、延慶本の文脈なのである。世を「アヂキナク」思うことが来世での救いを求めようとすることのきつかけとなるという筋立ては、仏道を志す者の思考過程として、一般的に理解しやすいものだろう。

如上の脈絡は、語り本では根本から解体されている。異口同音に父への恋しさを素直に吐露する我が子らの言葉に触れ、「無^ム為^カ方^ニ」思ったことが、維盛に自害の決意を促したというのである。語り本の維盛は、追い詰められ、その苦しみから逃れるために自死を選ぼうとしているのみで

あって、彼岸に救いを求めてなどいない。それは、覚一本が⑩を、

「抑これより穢土を厭にいさみなし。閻浮愛執の綱つよければ、浄土をねがふも物うし。たゞこれよりやまづたひに宮こへのぼつて、恋しきものどもをいま一度みもし、見えての後、自害をせんにはしかじ」とぞ、なく／＼かたり給ひける。

とされているを見れば、一層はつきりするだろう。屋代本にあった「当来ニハ修羅ニ墮^{オチ}ン事心憂^ウカルヘシ」や「妄念離^シテ」といった記述を除くことによって、「浄土をねがふ」心を持たない者が苦しみから逃れるために「自害」を選択するという文脈を、より純化しているのが、覚一本なのだ。来世への恐れも、救済を求める心もない。この⑩本文の変遷は、読み本系的本文(⑩は延慶本)から屋代本へ、そして覚一本へと方向の流動を想定した、第二節までの考察を裏付ける。そして、語り本が選んだこの新たな方向性が、やはり巻七の都落の場面と対応していることも、注意しておきたい。語り本は、都落に際して維盛が宗盛らを意識しているとする描写を一切することなく、代わりに読み本系にはない

「都ニハ父モナシ、母モナシ。…少^{ヨサナ}キ者共ヲハ、誰ニ

見譲^{ミヤウ}リ、何カニセヨトカ思給フ。恨メシウモ留給物哉」トテ、且ハシタイ且ハ恨テ泣給ニソ、三位中将モ無^ニシカカ為方「ハ思ハレケル。(屋代本)

若公姫君はしりいでて、父の鎧の袖、草摺に取つき、「是はさればいづちへとて、わたらせ給ふぞ。我もまいらん、われもゆかん」とめんくにしたひなき給ふにぞ、うき世のきづなとおぼえて、三位中将いとせんかたなげには見えられける。(寛一本)

といった表現を持つ。語り本が描くのは、ただ運命の前に無力で、妻子への愛ゆえに「せんかたなさ」に苛まれる者の姿である。同じく都落の場面における

若君姫君、大床へコロヒ出テ、声ヲハカキリニ喚キ叫ヒ給フ。(中略)此声々ノ、耳ノ底ニ留テ、西海ノ旅ノ空マテモ、吹風ノ音、立浪ノ声ニ付テモ、只今聞ヤウニソ被^レ思ケル。(屋代本)

という叙述が語り本に固有であるのは、語り本が維盛造形において志向したものを、端的に示しているといえるだろう。

五

読み本系、特に延慶本と語り本との質的な差異を以上の

ように整理するならば、問題は自ずと以後の維盛の行動にも及ぶ。屋島を出奔してから入水に至るまでの大筋は、読み本系・語り本系を通じて同様なのだが、右に見てきた部分との整合性が問題なのである。延慶本では、Ⅱで出家を決意した後、V・Ⅲでは、家族に自らの無事を告げようとしつつも、

心中ニハ思立給フ事モアレバ、「是計ニテゾ有ラムズラム」トオボシケルニ、涙ニクレテ、エツヶアヘ給ワネドモ、(中略)「終ニイカニ聞ナシテ、イカナル事ヲ思ワレムズラム」トオボスゾ悲シキ。

という思いがあったことを描写する。その言葉通り、巻十で一門からの離脱を決行し、高野へ赴く。「閑ニ臨終セム」という望みを果たすために聖地を目指したのである。しかし、

本三位中将ノ被^ニ生取^一テ、京、田舎、人ノ口ニ乗ダニモ心憂ニ、我サハ憂名ヲ流テ、差シモ賢ニオハセシ父ノ首ニ、血ヲアヤサム事口惜テ、千度百般、心ハ進給ケレドモ、恋ト恥トラ比レバ、恥ハ猶モ悲テ、泣々高野山へ詣り給ヒ…

とあるように、妻子との再会が果たされることはなかった。それを阻んだのは、亡き父への思いだという。妻子との別

れという犠牲を払ってまで一門の一員として生きることを選択し、にもかかわらず一門から疎外されたとき、早世した父の面影が、いわばアイデンティティの最後の拠り所として心に残されるというのは、平家嫡流の維盛にとつて自然なことだろう。父の名を汚すことへの恐れも、入水の前に父祖ゆかりの地である熊野を訪れる行動も、こうした心情とともに理解できる。その後維盛は、妻子への恩愛の情を断ち切れずに苦しみながらも、導師滝口に背中を押されて「忽ニ妄念ヲ翻シテ、向西又レ手ヲテ、高声念仏三百余反唱澄テ、即チ海ヘゾ入給フ」ことを得る。その心は大きく揺れ動きはしたものの、最終的には、「閑ニ臨終セム」という、自らが選び取った生き方を完遂したことになる。出家の決意から入水に至る読み本系の文脈は、整然と筋道が立っている。

だが語り本ではこのような理解は成り立たない。そもそも維盛は、自害によって苦しみから逃れるようとしただけで、妻子への思いで埋め尽くされた心には、来世での救いを信じられるほどの余地はなかった。その後、高野で滝口を前に

「同クハ是ニテ髻ヲ切テ、火ノ中水ノ底ヘモ入ラント思ソヤ。」

と述べるところで、唐突に「髻ヲ切」る意志が明かされるのだが、語り本系に固有の波線部に見えるように、その志も「同クハ」という程度の微弱なものでしかない。そんな人物が、わざわざ高野に赴き、聖地を巡ってから「忽ニ翻ニ妄念ヲ一、念仏数百反唱ツ、」海へと沈んでいくのである。ここには、読み本系とは異なる語り本系の特質がある。延慶本のように、自ら仏道に価値を見出し、臨終正念を求めたわけではない。逆らいようなない運命に絶望し、自らの生を絶とうとしたにすぎない。語り本が、敢えてそのように改編したのである。その上で、そんな者さえも救ってやろうとするのだ。そのために、語り本もまた維盛を高野へ赴かせるのである。以後の維盛の心には、滝口の出家姿を見て「可レ遁ハ、角テモ在マホシクヤ思ケン」と感じたり、熊野で「必ス西方浄土ヘ迎レ給ヘ」と祈るなど、徐々に道心が兆し始めたかに見える。だがCの脈絡を踏まえて読むならば、この時の維盛に、来世での救いを信じ、それに縋る気持ちやどれほどあったといえるのか。往生を願う数少ない言葉は、心底からのものといえる程の強さを持ち得ないまま、「古郷ニ留置シ妻子安穩ニト、被レ祈ケルコソ、厭ニ浮世ニ入ニ実道ニ一給ヘ共、猶妄執不レ尽ト覺テ悲ケレ」という叫びの前にかき消されてしまうのではないだろうか。

そして、入水直前になつても迷いを口にする維盛に対して、滝口は長い説法の後、

「成仏得道シテ悟^リヲ開カセ給ナハ、娑婆ノ故郷へ帰^リテ難^ク去カ^リシ人ヲモ導^キ、御恋シキ旁ヲモ迎^ヘ給ハン事、不^レ可^レ経^レ程ヲ、努々余念渡セ給ナ」

と告げる。この言葉を聞いて維盛は入水した。再び妻子に会えるという、その言葉自体は諸本同じである。読み本系では「閑ニ臨終セム」という希望と妻子への愛という、維盛を苦惱させる二つの思いを止揚し、信じる道へ赴く決意を固めさせてくれる言葉だつたらう。だが語り本の維盛像から、己の来世を願う強い意志は読み取れない。そんな維盛に滝口は、妻子との再会の可能性を説くのである。それは維盛にとつて、さしたる希望も持っていなかった自身の後世に、初めて光が射した瞬間だつたのではないだろうか。来世に救いがあると信じて希求し、そのために妻子恋しさを必死で断ち切つてゆくという読み本系の維盛描写は、仏教的な意味で筋道が立っている。しかし、語り本系の場合、臨終正念を求める維盛の気持ちは、読み本系に比して遙かに薄い。妻子への愛ゆえに絶望して死んでいこうとする人間が、最後に「再び愛する者たちに会える」という言葉に背中を押されて入水するのである。彼岸の世界に初め

て見出した希望が、仏による救済ではなく「愛する者達との再会」であつたとするならば、それを信じて入水した最期とは、純粹に仏教的な意味で救われるものであつたのだろうか。⁽¹⁶⁾確かに、「忽^{チニ}翻^ニ妄念ヲ」、念仏数百反唱ツ、という入水の様は、維盛が救われたことを暗示するだろう。だがそこに至るまでの脈絡は、読み本系のように筋道立つてはいない。それでも語り本の維盛が救われたとするならば、その「救い」とは、仏教的な意味を超えているのではないだろうか。それは、あえていえば、苦しみぬいて生きた者の最期が救われないものであつてよいはずはないという思い、極限の状況に置かれ、死んでいった人々への共感という情緒的なものであつたということになるだろうか。仏道による救済があることを知りながら、それに向かつて踏み出す強さを持たない者をも、情緒的に包み込んでやるうとするのが、語り本なのだ。維盛の入水を「心弱き人の往生」とする読み方は、語り本にこそふさわしい。

六

語り本の文学的な特質を、以上のように読みとるとき、いま一つ注目したい箇所がある。

若君ノ乳人ノ女房、北方ニ申ケルハ、「サレトモ、本三

位、中将殿ノ様ニ、生虜ニセラレ給ヒテ、京鎌倉引シロハレテ、浮名ヲモ流サセ給ハテ、高野ニテ御出家、熊野へ參ラセ給テ、後世ノ事祈請申サセ給テ、御身ヲ投給候。是ハ歎ノ中ノ御喜也。何ニ思食ストモ叶ハセ給マシ。御様ヲ替サセ給テ、後世ヲコソ訪進サセ給ハメト申セハ、北方「実ニモ」トテ、泣々様ヲ替、三位中将ノ後世ヲ訪給ケル。(屋代本)

とあるように、語り本系において、維盛の死を知った北の方が、嘆きつつもやがて出家をし、夫の後生を祈っていることである。読み本系では、北の方が出家することはない。そしてそれは、以前の文脈を振り返れば、全く当然のことなのである。先述のように、都落に際して維盛は、宗盛らに対して二心なきことを示すために、泣く泣く妻子を振り切つて出立している。この時点で維盛は、妻子と暮らすより、平家一門の一員として生きることを優先し、選択したのだ。その一門に疎外されてからは、臨終正念こそが維盛にとつての最重要課題だった。屋島離脱の後も、都に行くという選択肢もあつたはずのところを、囚われて父の名を辱めることを恐れて断念している。読み本系においては、維盛には常に、妻子より優先するものがあつたのである。妻子を大切に思いながらも、自らの後世を案じ、「閑ニ臨終

セムヨリ外ノ事有ベカラズ」と思い定める姿は、一門の没落を予見しながら、「不^レ如只名ヲ遁レ身ヲ退テ、今生ノ名望ヲ抛テ、来世ノ菩提ヲ求ニハ」として、肉親を残して一人先立っていった父重盛ともどこか通う。

しかし北の方は違う。彼女は都落以来、「いずれは迎える」という維盛の言葉を信じ続けていた。「三位中将」が囚われたと聞けば、

『少キ者共ノ恋シサニ忍ガタシ。イカ^ッシテ此世ニテ相見ズラム』ト返々云タリシカバ、同都ノ内ニ入タラバナド思テ、態ト被^レ取テ上ルヤラム(延慶本)

と、自分達に会うためにわざと捕虜になつてはいないかと案じ(Ⅳ)、夫が病だと聞けば、

「穴心ツヨノ人ノ心ヤ。所労アラバ、『カウコソアレ』ト、ナドカ告ザルベキ。軍ニアワヌホドノ所労ナレバ、大事ニコソ有ラメ。思歎ノツモリニヤ病ノ付ニケルコソ。都ヲ出デ、ヨリ、我身ノワビシキト云事ヲバ、一度モイワズ、『只少者共コソ心苦ケレ。終ニハ一所ニコソスマセウズレ』トノミナグサメシカバ、サコソ憑ミタルニ、サテハ身ノ煩ヒケルニコソ。皆人モ具スレバコソ具シタルラメ。野ノ末、山ノ末マデモ、一所ニ有バ互ニ心苦サヲモナグサムベキニ、カヤウニノミナク悲シ

サヨ」

と嘆く（延慶本V・ii）。夫が常に自分達のことを第一に思
つてくれていると信じていることが、北の方を支えてきたので
ある。その維盛が、出家の後高野・熊野を巡礼して、入水
して果てたという。常に自分たちのことを一番に考えてく
れていたはずの夫が、自分たちの存在よりも仏教的な救い
に価値を見出し、行動したという事実を知ったとき、北の
方はどれほど愕然としたことか。「忿迎取テアソバセムズ
ルゾ（延慶本V・iii）」という言葉が嘘だったと知ったとき
の心痛は、察するに余りある。読み本系が描く北の方の物
語は、間違いなく「捨てられた者の悲劇」なのだ。そんな
北の方が、語り本系のようにたやすく夫のために出家など
しないのは、当然なのである。

語り本系には、右の引用に該当するような、北の方の心
中に深く切り込んだ描写はない。維盛からの書状によって、
「迎えとるつもりはない」と知らされたときでさえ、「北方
御文見給テ、思入テソ被_レ歎ケル（屋代本C）」とあるのみ
であり、その心理描写は読み本系に比して著しく後退して
いる。それと引き替えに、出家をするのである。語り本は、
北の方の心中に分け入って、戦乱の中起きた一つの悲劇
を描出しようとはしない。夫の霊を慰め、その魂に寄り添

う役目を与えてやるのが、語り本の方法なのだ。『平家物語』
では、「敗れていく人間の傍には必ずと言つていいほど、寄
り添う人間がいる」とは松尾葦江氏の指摘²³であるが、その
ようにして動乱の中で死んでいった者を情緒的に包み込ん
でやろうとする傾向は、特に語り本系に顕著である。それ
が『平家物語』に本来内在するものであるとすれば、語り
本とは、そのような『平家物語』の一面を、拡大して成立
したもののだろう。維盛北の方像の変質は、そのことを
よく表しているように思われる。

【注】

- (1) 千明守氏「屋代本平家物語の成立―屋代本の古態性の検証
・卷三「小督局事」を中心として―」（『あなたが読む平家
物語1 平家物語の成立』、一九九三年十一月、有精堂）
- (2) 櫻井陽子氏「平家物語の形成と受容」第一篇第四章（二〇
〇一年、汲古書院。初出一九九九年）、志立正知氏「平家物
語語り本の方法と位相」第六章（二〇〇四年、汲古書院。
初出二〇〇〇年）など。

- (3) 引用は『屋代本高野本対照平家物語』（一九九〇～九三年、
新典社）により、適宜影印（一九六六年、角川書店）を参

照した。

- (4) 「心弱き人の往生―維盛―」（『軍記と室町物語』、二〇〇一年、清文堂。初出一九九二年）。ただし具体的な論証は行われていない。

- (5) 引用は『訓読四部合戦状本平家物語』（一九九五年、有精堂）による。

- (6) 本節で扱った記事に関しては、水原一氏「維盛・六代説話の形成」（『平家物語の形成』、一九八一年、加藤中道館）が、延慶本を古形とし、語り本の形は整理の結果と見る。

- (7) 引用は『校訂延慶本平家物語』（二〇〇〇～二〇〇九年、汲古書院）による。

- (8) 引用は、日本古典文学大系本による。

- (9) これが屋代本の全てにいえるわけではないことは、千明氏注1論文に明らかである。

- (10) ただし、隣接する梶井宮についての記事との前後関係が読み本系とは逆になっており、完全に一致するわけではない。
- (11) 後に高野山に赴いた維盛は、滝口を前にして

「…古郷ニ留メ置シ少者共カ事ヲノミ、明テモ暮テモ思居タレハ、物思フ心ヤ色ニ見ケン、大臣殿モ二位殿モ、池大納言ノ様ニ此人モ、二心口有トテ打解給ハネハ、最ト心モ不レ留シテ、屋島館ヲマキレ出、是マテ迷来レリ」

（屋代本）

と述べているが、語り本の文脈では齟齬を来す。維盛が本心を語っていないのだとも読めるが、いずれにしても改編を経た結果であることは確実だろう。

- (12) 鈴木則郎氏「『平家物語』における平維盛像についての一考察」（『東北大学文学部研究年報』29。一九八〇年三月）に指摘がある。「小松家の特殊なあり方」の問題も含めて、諸本の維盛記事が詳細に比較されているが、語り本系と読み本系の前後関係は保留する。

- (13) 青木千代子氏「『修羅道』の成立」（『国語年誌』11、一九九二年十一月）

- (14) 鈴木彰氏「平家物語の展開と中世社会』第一部第二編第一章（二〇〇六年、汲古書院。初出二〇〇〇年）。は延慶本において維盛と頼盛が一对の存在として扱われているとする。

- (15) 『源氏物語』賢木では、桐壺帝の死後、源氏と藤壺が世をあぢきなく思つて出家を志す。

- (16) 池田氏注4論文は、維盛入水の場面には、妄念の中に死んだ宗盛のような方向に「いつ揺れるやもしれぬ不安」があるとする。

- (17) 池田氏注4論文

- (18) 『軍記物語原論』第三章第二節（二〇〇八年、笠間書院）。

〔付記〕 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（研究活動ス
タート支援）による成果の一部である。